

修士論文（要旨）

2019年1月

大学生の発達障害傾向および表情認知力と、対人ストレスおよび健康度  
との関連について

指導 種市 康太郎 教授

心理学研究科  
臨床心理学専攻

217J4008

高桑 将太

Master's Thesis(Abstract)

January 2019

The Association between (1) Symptoms of Autism Spectrum and Poor Ability  
to Recognize Facial Expressions and (2) Interpersonal Stressors and Poor  
Health among University Students

Shota Takakuwa

217J4008

Master's Program in Clinical Psychology

Graduate School of Psychology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Kotaro Taneichi

## 目次

第1章	研究背景	1
1.1	障害者の就労状況	1
1.2	障害者雇用の現状	1
1.3	発達障害者の就労課題	3
1.4	大学生の自閉症スペクトラム傾向についての研究	4
1.5	発達障害を測定する質問紙	4
1.6	発達障害者の表情認知	5
第2章	目的と意義	8
2.1	目的	8
2.2	意義	8
第3章	方法	9
3.1	調査対象者	9
3.2	調査時期	9
3.3	調査方法	9
3.4	調査内容	9
3.5	分析方法	11
3.6	仮説	11
第4章	結果	13
4.1	分析対象者の特性	13
4.2	性別による尺度得点の平均の比較	13
4.3	性別による尺度得点の相関	13
第5章	考察	18
5.1	仮説1について	18
5.2	仮説2について	18
5.3	仮説3について	20
5.4	仮説4について	20
5.5	仮説5について	21
5.6	仮説6について	21
5.7	発達障害傾向にある者の生じやすい課題と支援の手がかりの検討	22
第6章	まとめ	25

謝辞

引用文献

資料

## 第1章 研究背景

近年、社会の動きとして、障害者の雇用が増加している。内閣府(2018)によると、障害のある人の就労意欲が高まっている中で、障害者が、希望や能力、適性を十分に活かし、障害の特性等に応じて活躍できることが普通の社会、障害のある人と共に働くことが当たり前の社会の実現に向けて、障害者雇用対策の一層の充実を図っていく必要があると述べられている。また、近年ハローワークにおける、障害者の、新規求職者数が増加しており、その雇用の促進を図ることが必要となっている(内閣府, 2018)。

障害者雇用において、様々な支援が行われ始めているといった社会の傾向から、職場適応、社会適応の観点から、大人の発達障害に注目が集まっていると考えられ、発達障害者は、様々な就労における課題があると考えられる。梅永(2017)は、発達障害の中でも、最も課題が多い者はASDであると述べている。また、梅永(2004)は、発達障害者を雇用してから生じた課題をまとめており、ASDに良く見られる特性から生じた課題が多いことがわかった。そのため、発達障害者が成人期に適切な仕事に就くことができるためには、大学生活の段階から、発達障害支援を行っていく必要があると考えられる。

このような発達障害者に対して、障害特性の把握をするために、発達障害傾向を測定する質問紙も開発されている。ASDに特化して見てみると、AQという質問紙がある。AQは、成人に向けた発達障害傾向の臨床的なスクリーニングを行うにあたって、有効な質問紙であると考えられる。

発達障害の問題の1つに社会的相互作用の障害が取り上げられ、表情認知の難しさの問題が指摘されている。光戸・橋本(2010)は、自閉症によるコミュニケーションの障害は、他者の表情から感情や意図を読みとることが困難であり、表情からの情報を正しく認知できないことに起因している可能性が考えられると報告している。このことから、発達障害の中でも、ASD傾向がある者が、表情認知に関する問題を抱えやすいと考えられる。

## 第2章 目的と意義

大学生の発達障害傾向、表情認知力と対人ストレス経験、精神的健康度との関連を明らかにすることで、発達障害傾向にある者が、学生生活及び、就労後に生じやすい課題を見つけること。また、発達障害傾向のある者のコミュニケーションに関する支援の手がかりを見つけることを目的とする。表情認知と社会的相互作用との関連性が明らかになることで、発達障害傾向のある大学生への支援方法を考える手がかりになると考えられる。また、発達障害傾向のある大学生の表情認知力の傾向を見ることが出来、介入可能な点を見つけることが出来るため、臨床的介入への実践的な立案を検討することが出来ると考えられる。

## 第3章 方法

都内A大学に在籍する、調査協力に承諾した教員の講義を受講する、大学生男女450名程度を対象とした質問紙調査を行った。調査は研究倫理委員会承認後(2018年4月25日受理No.17046)の2018年4月から8月の間に行った。質問紙の調査内容は以下の通りである。

1) 表紙 調査目的を「対人相互作用と表情認知に関する研究」と記載した上で、質問紙

の枚数、質問紙調査における留意点および、倫理的配慮を記載した。

- 2) 対人ストレッサー尺度 対人関係におけるストレスを測定する尺度で、橋本(2005)によって作成された。全 18 項目である。
- 3) K10 質問票日本語版 不安と抑うつに関するスクリーニング尺度で、Kessler et al. (2002)によって作成され、古川ら(2003)によって日本語版が作成された。全 10 項目である。
- 4) 自閉症スペクトラム指数日本語版(AQ) 自閉症スペクトラム障害のスクリーニング尺度で、Baron-Cohen et al. (2001)によって作成され、若林・東條(2004)によって日本語版が作成された。全 50 項目である。
- 5) 成人版表情認知検査 表情認知能力を測定する尺度であり、小松ら(2012)によって作成された。全 37 項目からなる。
- 6) フェイスシート 対象者の年齢と性別の記入を求めた。

#### 第 4 章 結果と考察

*t* 検定の結果から、「表情認知検査得点」において、男女の間に有意な差が示され、男性よりも女性の方が、得点が有意に高いことが示された。このことから、表情認知力においては、男性よりも女性は表情を認知し、そこから適切に感情を読み取れることが示唆された。

発達障害傾向と表情認知力に関して、男性においては、発達障害傾向と、表情認知力には関連があることが示唆され、特に、社会的スキルの低い者や、コミュニケーション能力が低い者が、表情を適切に認知できない傾向があることが示唆され、細部へのこだわりを持つ者は、表情を適切に認知できるといった傾向があることが示唆された。しかし、女性においては、発達障害傾向があることと、表情認知力には、有意差が示されなかった。

発達障害傾向と、対人ストレッサー経験に関して、女性においては、発達障害傾向のコミュニケーション能力の低さと、対人ストレッサーには関連があることが示唆され、特に、コミュニケーション能力の低さから、自身に非があつて、相手に迷惑や不快な思いをさせてしまうことで、対人ストレスを感じたりするなどの、対人ストレスを感じる傾向があることが示唆された。男性においては、発達障害傾向があることと、対人ストレッサー経験との間には、有意差が示されなかった。

発達障害傾向と精神的健康度に関して、男性と女性は共に、発達障害傾向と精神的健康度との間に関連があることが示唆され、男性においては、コミュニケーション能力の低さから、精神的健康度が低くなる傾向があることが示唆された。また、女性においては、社会的スキルの低さや、コミュニケーション能力の低さから、精神的健康度が低くなる傾向があることが示唆された。

表情認知力と対人ストレッサーに関して、男性と女性ともに、表情認知力と対人ストレッサーとの間には、有意差が示されなかった。

対人ストレッサーと精神的健康度に関して、男性と女性とともに、対人ストレッサーと精神的健康度には関連があることが示唆され、男性は、対人ストレスを感じるにより、精神的健康度が低くなる傾向にあることが示唆された。また、女性においては、対人ストレッサーを経験することにより、精神的健康度が低くなる傾向にあることが示唆された。

今回の結果から、男性においては、発達障害傾向と表情認知力には関連があることが示唆され、精神的健康度が低くなることが示唆されたものの、表情を適切に認知することと、対人ストレス経験との間に、有意差が示されなかったため、表情を適切に認知することができても、大学生活や就職活動、さらに就労後の対人ストレス経験を減少させることは、困難だと考えられる。そのため、男性においては、表情を適切に認知することができることにより、精神的健康度を高くすることができると考えられるため、コミュニケーションに関する支援に関して介入すべき点は、男性の場合は、表情認知力そのものを向上させるということよりも、発達障害傾向から生じる課題に関してアプローチをし、社会的スキルやコミュニケーション能力の習得した上で、表情を適切に認知できる経験を積むことが良いと考えられる。女性においては、発達障害傾向があることと、表情認知力との間には、有意差が示されず、さらに、もともと男性よりも女性の方が、適切に表情を認知することができたという結果から、発達障害傾向にある女性が、表情を適切に認知することができないことによる生活上や就労後の困難さは起こりにくいと考えられる。

## 引用文献

- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J., & Clubley, E. (2001). The Autism-Spectrum Quotient (AQ): Evidence from Asperger syndrome/ high-functioning autism, males and females, scientists and mathematicians. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 31, 5-17.
- 橋本 剛(2005). 対人ストレス尺度の開発 人文論集, 56(1), A45-A71.
- 古川 壽亮・大野 裕・宇田 英典・中根 允文(2003). 一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究. 平成 14 年度厚生労働科学研究費補助金(厚生労働科学特別研究事業) 心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究 研究協力報告書.
- 光戸 利奈・橋本 優花里(2010). 表情認知のメカニズムとその障害について 福山大学こころの健康相談室紀要, 4, 83-88.
- 内閣府(2018). 平成 30 年度版障害者白書.
- Kessler, RC., Andrews, G, Colpe, LJ, Hiripi, E, Mroczek, DK, Normand, SL et al. (2002). Shortscreening scales to monitor population prevalences and trends in nonspecific psychological distress. *Psychological Medicine*, 32, 959-76.
- 小松 佐穂子・中村 知靖・箱田 裕司(2012). 成人版表情認知検査 トーヨーフィジカル
- 梅永 雄二(2004). こんなサポートがあれば! エンパワメント研究所
- 梅永 雄二(2017). 発達障害者の就労上の困難性と具体的対策——ASD 者を中心に 日本労働研究雑誌, 685, 57-68.
- 若林 明雄・東條 吉邦・Baron-Cohen, S.・Wheelwright, S. (2004). 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化——高機能臨床群と健常成人による検討—— 心理学研究, 75(1), 78-84.